

明治28年2月28日に、広島県に生まれ、昭和59年7月11日に歿す。大正8年東京帝国大学工学部建築学科卒業、同時に、大学院で研究をつづけ、大正11年3月に大学院を修了、同年4月に東京市役所に就職、建築局技師として、関東大震災後の帝都復興事業に専念、傍ら「農民建築」に関心をもちつづけ、その研究成果によって昭和18年「工学博士」となる。

学位取得後昭和17年まで東京市で働き、同年に住宅営団の技師となり、学位論文「農民建築」を出版する。同19年から21年まで、インドネシアのパンドン工業大学教授、戦後帰国、昭和24年東京都が新しく設立した東京都立大学工学部建築学科の教授となり、昭和36年定年退職まで教壇に立つ。この間25年から1年間、東京神学大学夜間部に通学する。25年には、予てから研究の課題だった農民建築の学会を設立、会長となる。

都立大学を退いてから、「石原建築設計事務所」を設立主宰すると共に、東京愛隣会(社会福祉法人)を、東京都足立区のスラム街に設立して理事長となり、最後まで保育園やセトルメントの経営に尽瘁する。

寡言冷静、敬けんなクリスチャンとして、スラム地区では子供達からも、慈父のように慕われた。したがって本職につながる建築事務所の方は、若い人達にまかせ、寸暇があれば好きな山登りをやって、ほとんど日本全国

の著名の山は踏査したといっ
てよい。何時会っても、山登りの
姿だったから、「石原=山男」
とは同意語とさえなっていた。
東京市の時代にも、市の山岳会
の会長をつとめ、当然日本山岳
会の役員となり、最初に都立大
学のヒマラヤ登山隊の隊長、つ
づいて大阪市立大学のヒマラヤ
登山のときにも隊長の役をつと
めている。

先生は役職を離れて、建築事務所をつくられたが、時間の大半は足立の隣保館で過された。その姿には、震災直後の焼跡で、ローソクの光で資本論の原典を読み合ったときの影がどこかに残っていたように思われる。事務所の収入の大半は隣保館の運営に使われたと聴いているが、そんな痕跡など少しも見せないところに人間石原の骨頂が現れていたと思う。

都市美協会をはじめ武蔵野文化協会・日本農民建築学会の各会長を務め、幅広い活動をしたが、自ら設計した建物はきいてない。しかしながら生存していれば、是非都庁の設計をやって欲しいと思う建築家である。

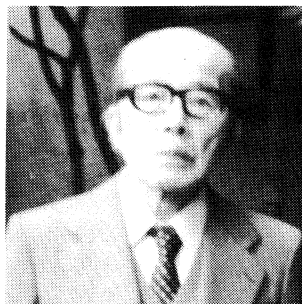


石原 憲 治 (いしはら けんじ)

東京都立大学・東洋大学名誉教授 磯村 英 一

略歴 (石原憲治)

- 1895 (明治28) 年 広島県に生まれる
- 1919 (大正 8) 年 東京帝国大学工学部建築学科卒
- 1922 (大正11) 年 同大学院修了
- 1922 (大正11) 年 東京市技師
- 1940 (昭和15) 年 東京市財務局建築部営繕課長
- 1941 (昭和16) 年 住宅営団研究部調査課長
- 1944 (昭和19) 年 工学博士
- 1944 (昭和19) 年 バンドン工業大学教授
- 1949 (昭和24) 年 東京都立大学工学部教授
- 1957 (昭和32) ~1960 (昭和35) 年 日本都市計画学会副会長
- 1961 (昭和36) 年 退職 石原建築設計事務所設立
- 1961 (昭和36) ~1962 (昭和37) 年 日本都市計画学会会長
- 1984 (昭和59) 年 逝去



石原 憲 治

明治28年2月28日に、広島県に生まれ、昭和59年7月11日に歿す。大正8年東京帝国大学工学部建築学科卒業、同時に、大学院で研究をつづけ、大正11年3月に大学院を修了、同年4月に東京市役所に就職、建築局技師として、関東大震災後の帝都復興事業に専念、傍ら「農民建築」に関心をもちつづけ、その研究成果によって昭和18年「工学博士」となる。

学位取得後昭和17年まで東京市で働き、同年に住宅営団の技師となり、学位論文「農民建築」を出版する。同19年から21年まで、インドネシアのバンドン工業大学教授、戦後帰国、昭和24年東京都が新しく設立した東京都立大学工学部建築学科の教授となり、昭和36年定年退職まで教壇に立つ。この間25年から1年間、東京神学大学夜間部に通学する。25年には、予てから研究の課題だった農民建築の学会を設立、会長となる。

都立大学を退いてから、「石原建築設計事務所」を設立主宰すると共に、東京愛隣会（社会福祉法人）を、東京都足立区のスラム街に設立して理事長となり、最後まで保育園やセツルメントの経営に尽瘁する。

寡言冷静、敬けんなクリスチャンとして、スラム地区では子供達からも、慈父のように慕われた。したがって本職につながる建築事務所の方は、若い人達にまかせ、寸暇があれば好きな山登りをやって、ほとんど日本全国の著名の山は踏査したといってもよい。何時会っても、山登りの姿だったから、「石原＝山男」とは同意語とさえなっ

いた。東京市の時代にも、市の山岳会の会長をつとめ、当然日本山岳会の役員となり、最初に都立大学のヒマラヤ登山隊の隊長、つづいて大阪市立大学のヒマラヤ登山のときにも隊長の役をつとめている。

彼は役職を離れて、建築事務所をつくられたが、時間の大半は足立の隣保館で過ごされた。その姿には、震災直後の焼跡で、ローソクの光で資本論の原典を読み合ったときの影がどこかに残っていたように思われる。事務所の収入の大半は隣保館の運営に使われたと聴いているが、そんな痕跡など少しも見せないところに人間石原の骨頂が現れていたと思う。

都市美協会をはじめ武蔵野文化協会・日本農民建築学会の各会長を努め、幅広い活動をしたが、自ら設計した建物はきいていない。若し生存していれば、完成した都庁の建物をどう評価するかきいてみたい人の一人である。